
考えるひと

岡田 啓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
考えるひと

【Nコード】
N2113U

【作者名】
岡田 啓

【あらすじ】
そこには男がいる。何をしているかはわからない。それを君と僕で考えていく。

そこには男がいる。男は行儀よく座っているように見える。何を
しているかはわからない。どこかで見たこともあるような気もしな
くはない。顔はぼんやりと、水面に映るようにしか見えない。どこ
にいるかもよくわからない。霧がかかったようにぼんやりとして
いたりする。

僕は君に尋ねてみる。

「この男はいったい何をしているんだろう」

君はその男の心情を隅々まで探るように難しい顔をしている。僕は
君が好きだ。こんなに真剣に僕のくだらない趣味に付き合ってくれ
るなんて。

「なんだろう。何か、考えているのだろうか」

僕に聞かせることを目的としないような声で君は言った。僕はその
ことも考えていた。「この男は何か、考えている」ということは、
すでに僕の中では古い考え方だった。

「そうか。じゃあ、ロダンの『考える人』をイメージしていいのだ
ろうか。話は逸れるけれど、『ホモサピエンス』も『考えるヒト』
ということもあるだろう。やはりあそこに結びつくのかな。それな
らなぜあそこに『考える人』つまり僕たちがいるんだ？ 僕たちは
地獄の門をくぐる側じゃないのだろうか。何も考えずに門が開いた
ら入っていくのが僕たちではないのか。

こんなことを話している場合ではないな。問題はこの男だ。この
男は少し危険な気配がする。それで、僕はこの男が「何か、考えて
いる」という君の意見には反対だ。僕もそのことは考えていた。反
対というかそれは「そこにいる」ということと同じようなことだ。
それにしても、この男の顔はぼんやりとし過ぎている。」

君はよくよくと男を見直す。

「なるほど。言われてみればそうだ。どういうことだろう。」
しばらく僕と君との間に時間だけが流れる。静かな時間だ。

「どうもキリがないな。目線を変えてみよう。この男はいつたどこに
いるんだ。場所さえ分かれば、目的が見えてくるはずだろう」
僕はこの空気から逃げ出すため、わざと大声で君に尋ねる。

「場所か。そうだな。とても静かな場所、というのは間違いない」
君は僕の出方を覗うように慎重に言葉を発した。

「静かな場所」僕は少し間を開けて言う。「うん、それは間違いない。
時間がゆっくり流れるような場所だ。ただ、そんなことはこの
男の持っている雰囲気ですでに明らかだ。私たちはこうやってこの
男に引き寄せられているじゃないか。

問題は、具体的に、どこにいるかということなんだ。静かな場所
といったらどこになるんだろう。想像できるかい」

僕は決して頭の良い方ではない。想像力、という点に関しても大した
自信をもっていない。この状況で君に答ええないという選択肢なん
てなかった。当てずっぽうに答えを出してみた。「ああ、図書館は
どうだろう」

「図書館？」君は真剣な顔で僕の顔を見つめる。直感で言ったの
で、君がこんなにも本気で受け取ることを予想していなかった。君
の睨みつけているわけではないのだが、僕はその視線に削りたて
の鉛筆のような、そんな鋭さを感じた。君の視線がこのように鋭く
なるときはめったにない。「どんな図書館なのかな。あなたのイメ
ージでは」

「僕のイメージ。僕のイメージでは、そうだな。大きい図書館、で
はない。そして、きれいではなく本もいまいち整理されていない」
僕はふと通っていた小学校の図書室を思い出した。司書もいない。
本も少ない。利用者だってほとんどいない。校内の一番西のほうに
あり、暗い印象が残っている。僕たちの間では、怪談話にも使われ

るくらいの陰湿な図書室であつた。「学校の、図書室」
「学校の図書室か。なるほど」

しばらく、また沈黙が続く。君はまたもや『考える人』状態へと陥つた。君は何を考えているんだらう。僕は沈黙に身を任せて、嫌な湿気に覆われている梅雨の時期の、僕が通つた小学校の図書室に想いを馳せた。僕は、何を読んでいたのだらう。幼い僕が夢中になつて読んでいた本。図書館という空間に覆われて本を読んでいるという感覚ではなかった。その本が作り出す世界を再生する装置としての図書館だつた。だから、図書室以外ではあまり本は読めなかつた。夕暮れの近づく放課後に幽霊が出そうでも、僕は図書館で本を読まなければいけなかつた。その欲求は、昔ほどではないがまだ残っている。しかし、何の本を読んでいるかは思い出せない。僕の回想は、どうしても「何を」読んでいるかで途切れてしまふ。僕はそのなぜか疲労感を伴う行為を中断し、この男について考えることをやめた。僕はなんとなく君のことについて考えてみる。

君といるときは、むしろ沈黙であるほうが落ち着いた。楽だというものもあるし、おそらく君と僕は本質的に似ているからだらう。同じ雰囲気が流れていることは確かに僕自身も感じる。そんなことを考えるときに、僕は「ドッペルゲンガー」についての考察をする。もしかしたら、君こそが僕の「ドッペルゲンガー」なのではないだらうか。もしそうならば、どちらの死が近いというのだらうか。芥川龍之介が自殺する直前、ドッペルゲンガーを見たらしい。江戸時代には「影の病」とされたらしい。けれども、君は影ではない。君は君なのだ。そして、僕は僕。似ているとは言つても持っている雰囲気の話だ。本質的な点は全く異なっている。君と僕が同じであつたなら、僕が困るのだ。僕は僕自身に対して「僕は僕」と言い聞かせた。

無意識のうちに唇を動かしていたのだらう。君がそれに気づいた。「それにしても変だ。この男には時間というものが存在しないよう

な気がする」

「そんなことはない。時間のない世界なんてありえないし、もし、今ここで、僕が死んだとしても時間は進み続ける」

僕は僕が死んだ後の世界について、考えられることを考えてみた。まず、親が悲しんで友人が悲しむ。そして、葬儀が行われて、僕は本当に死んだことになる。そして、その後は誰かが、僕の分も生きなければいけないといって、きっと僕は忘れ去られていく……。そうだ、僕が死んだとしても時間は続いていく。地球がなくなってもそれは変わらない。宇宙に何も存在しなくなっても時は流れ続けるのだ。僕は、なんだか悲しくなってしまった。

「ごめん。僕もあまりうまく表現が見つからないんだ」

それは心のない《ごめん》であった。僕はなおさら悲しくなった。君との意見が一致しないときはたいていのことは不器用にしかできなくなる。

「じゃあ、仮に時間がなかったら人はどうなる。この男は図書室にいるはずだ。何か目的――例えば、本を読むとか調べ物があるとか――があつて図書室にいる。目的があるということは未来を見ているということだ。少なくとも「図書室にいたい」という目的はある。時間はきちんとあるじゃないか」

君はまだ納得のいかないような顔をしている。僕は一瞬だけこの男の表情が見えたような気がした。にやつと笑っていた。僕たちが頭を痛めながらも悩んでいるのをあざけるように、この男は笑ったのだ。僕は、時間という考えても考えきれないほど大きいものについて考えている僕たちが馬鹿らしく思えてきた。君は時間について考え過ぎていて、この男の表情に気がついていなかった。

「おい、今この男が笑ったぞ。僕たちを馬鹿にしたように笑ったんだ」

「そうか。見ていなかった。けれど、なんだかこの男が君に何かを訴えかけているような気がするんだ。君だけに。時間についてもそ

うだ。僕にはどうがんばったて時間というものが見えてこない。この男の存在だけを感じている。男が僕に訴えかけてこない」

僕には不思議だった。最初のころよりもこの男は僕に何かを訴えかけようとしているように思える。

「それは君が心を開いてないからではないのか」

「そうかもしれない」君は力なく言った。この男の時間について考えていたときは、別人のような存在感だ。そういえば、直接は言わないけれど君は存在感が常に変化している。時よりいないのではないか、というほどに存在感が薄くなる。かと思えば僕のほうが世界に存在していないのではないかというくらいの感覚を覚える。君がこの男の時間について理解できないのと同じように、僕は君の存在自体がわからなくなってしまった。

啓介は、すでに半分が姿を隠している夕日を何を考えるわけでもなく、眺めていた。あと、何回この夕日を見たら僕は死んでしまうのだろう。夕日が沈んだり、朝日が僕らを照らしたり、夏の太陽が日焼けをさせたり、それらは地球が回っているということだ。つまり時間が進んでいっているということだ。地球が回った距離の分だけ、死に近づく。

夕暮れ時の、幼いころに怖かった公園で啓介はそんなことを考えた。考えるだけ考えて何もできないままだ。

刻一刻と時間は進んでいる。

五、六人の小学生の集団が「バイバイ」と何回も何回も繰り返す。五〇メートルほど離れた啓介の耳にもうるさく聞こえるくらいの声の大きさだった。

あと、少しなのだ。

外灯が、何回か点滅してから明るく啓介を照らした。上を見るとすぐに虫たちが本能に身を任せて、光に寄ってきていた。

「夕暮れの図書室、ということにはわかった。僕にはもうはっきりと見えてきている」

僕は君に自信をもつてそう言った。

「駄目だ。見えてこない。けれど、それがわかったのなら、この男が何をしているのかわかるってくるだろう」

どうだろう、と僕はもう一度この男について考えてみた。夕暮れの図書室で、何をしている？僕は静かな湖の上で小さな青いボートに乗って釣りをしているようだった。湖の底は想像できず、地球の裏側まで貫通しているのではないかと思うほどだ。それくらいとてつもなく遠いところから僕は答えを探そうとしている気がする。

「結局はそれが理解できなければ、何の意味もない」

君なんて何もわかっていないじゃないか。と言おうとしたがやめた。君はそれを十分すぎるほどに、恥じていた。君は自分自身に失望していた。その上で、僕にこんなことをいうのだ。君の目的は何なのだろう。

「僕にはよくわからなくなってきた。なぜ僕がこんなわかりそうもないことを考えなければいけないんだろうか。そもそも、正しい答えなんて見つからないような気がする」

君は僕の話す言葉の奥の深層心理まで探るように軽くうなずきながら聞いてくれた。やはり、僕は君が好きだ。もう一人の僕として認識していたい。

「それはそうだ。正しい答えはない」淡々と君が話す。「そもそもこの男が何をしてきたかを聞いてきたのはそっちだ。そうやって投げ出すのならば、そこまでのものだったということだろう」

僕はこの行為について、疑いをかけ始めてしまっていた。この男が何をしていたつかまわない。ただ、この男の存在自体が間違っている。

「なぜそうやって諦めようとするんだ」君がいきなりきつい口調となった。僕は驚き、顔を上げると君は泣いていた。「自分の選んだ道じゃないか。諦めたらこれまでの時間は無駄なものになるんだぞ。君は言ったじゃないか。好きなことをやってなければ人生はつまらない、嫌なことをして働くななんて人生を売っているようなものだって」

*

啓介はどうしようもなくなっただけのため息をついた。もうすっかり辺りは暗くなっていたので、公園には啓介以外は、鳩くらいしか見当たらない。確かに僕は自分で選んだ道を進んでいる。だけど実際は、描いても描いても絵は売れていない。自信満々でコンクールに出した作品に最悪な評価がついて返ってくる。絵が有名にならないからお金が入らない。そうしたら生きるためにはバイトをしなければいけない。いや、もちろん選ぶ道に正解なんてないこともわかっている。だからこそ、絶対に譲ることのできない絵という道を選んだのだ。

「この男が何をしているか。それがわかったとして君にはそれを表現できるのか。世界中の人々に何かを影響を与えられるか」君がそう言つと、僕はとうとうわからなくなった。言い返す間もなく君は続ける。「できないよ。きつと。君が持っているものは大きすぎるんだ。この男はそれを表しているんだ。だからこの男を描こうとしても描けない。まだ、絵にする段階じゃなかったんだ。君はまだまだ未熟だ。世界が狭すぎる」

啓介は風景を平面的にしか見られなくなった。考えるのはやめましょう。袖が少しよれたクリーム色のＴシャツが肌に張り付いて気持ち悪かった。なにも、今日仕上げる必然性はないのだ。啓介は一

人の男が座っているだけのキャンパスを丁寧にしまい込んだ。外灯にはかなりの数の虫が集まっていた。啓介はそれを気持ち悪がって、少しか急いで帰る準備をした。公園には、やはり誰もいなかった。

（後書き）

うまくまとまりきれませんでした。というか諦めました。絵を完成させてもいいけどそんなすごいやつは書きたくないしなー、というか諦めたところはそのまま僕を映してますね。

知り合った絵描きさんに「まず人をかいて、そいつが何をしてるのか」考えて絵を構成していく方がいたのでそれを小説でしてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2113u/>

考えるひと

2011年6月19日21時18分発行